

テレホン法話原稿

第2組 上宮寺 一色 順秀

昨年の六月に父が亡くなり、住職を引き継ぐことになりました。

父は大谷大学で教鞭をとりながら、住職を掛け持ちで務めるということを二十五年ほど続けておりました。

父は大学で「華嚴経」を研究しておりました。

華嚴経の入法界品には、善財童子が諸国をまわり、五十三人の善き先生・善知識の教えを受けていくというものであります。その善知識には菩薩だけでなく、在家信者や、医者、商人など様々であります。

親鸞聖人も法然聖人との出遇いにより、念仏往生の確信を得られ、歎異抄で法然聖人を「よきひと」とおっしゃっておられますが、私は父が亡くなるという経験を通して、私の「よきひと」とは実は身近にいたのではないかと考える様になりました。

家族が亡くなるということは辛いことであり、もう会えないという寂しさはありますが、死んでそこで終わるのではなく、亡き人と私の関係性は続いていくと思います。

非常に感覚的ですが、私という存在のなかに、父のいのちが含まれているという事を、父が遺した書籍などを読むことを通して知らされたのです。亡くなったから初めて気づかされる事も多いのではないのでしょうか。

仏教学者の中村元先生が「こころの時代」という番組で「清らかな志を持った人とともにいることが、すでに安らぎの境地にいることである」(サンユッタ・ニカーヤ)というお言葉が私のなかで、よきひと、善知識と出遇う事と重なった気がしました。

近くにはいない存在になった父ではありますが、人を超え、言葉を超えたはたらきとして、私を導いてくれたんじゃないかと近頃想うのです。

身近な人の死。それは無常ではありますが、「この世の理をしっかりとみなさい」という、厳しくも、慈しみある私たちを導く、み光なのではないかと感じます。